

教員活動状況報告書

提出日：令和 5年 3月 2日

所 属：生命・環境科学部 食品生命科学科

氏 名：石原 淳子 職位：教授

役 職：食品生命科学科長、環境保健学研究科長、
データサイエンスセンタ長

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

私の教員としての責任は、学生がスキルと知識を身につけると同時に、学んだことが社会に役立つ楽しさを感じることで、自己肯定感をはぐくみ、自信をもって社会に出られることをサポートすることです。

学科では食の情報分野に関連する科目（公衆栄養学、公衆衛生学、疫学概論）および卒業論文、全学の地球共生系データサイエンス・同演習の他、オムニバス科目で地球共生論の1回分を担当しています。また、大学院では授業担当、および博士後期課程の大学院生1名の研究指導を行っています。

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
公衆栄養学	食品生命科学科	必	3	60
公衆衛生学	食品生命科学科	必	2	58
疫学概論	食品生命科学科	必	3	59
卒業論文	食品生命科学科	選	3,4	22
地球共生系データサイエンス・同演習	全学	自	2~6	23
地球共生論	全学	必	1	518
栄養疫学特論	環境保健学研究科・ 環境保健科学専攻	選	1	2
栄養疫学特別演習II	環境保健学研究科・ 環境保健科学専攻	選	2	2
栄養疫学特別実験II	環境保健学研究科・ 環境保健科学専攻	選	2	2
栄養疫学特別実験III	環境保健学研究科・ 環境保健科学専攻	選	3	2

2. 教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

私の教育理念は、「科学的根拠に基づく食と健康に関する情報を見極め、そのスキルと知識をつかって社会に貢献する人材を育てる」ことです。食品生命科学科の学生の多くは、資格を持つ専門家としてではなく、様々な知識とスキルを活用して食に関連する幅広い分野で活躍するジェネラリストを目指しています。現実社会において、様々な観点から実践的な判断を求められる場面に遭遇した際、しっかりとした専門知識の軸と、科学的根拠を見極める力（サイエンスリテラシー）を持ち、科学的に正しい選択できる力を持ち、その力を社会に還元できる人材育成をしたいと考えています。

※分量の目安：8～12行（320字～480字）

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

上記の理念を実現するための教育の方法として、「知的好奇心からの動機付け」「社会実践につながる教育」「授業計画の見える化」「達成度の見える化」を行うことを心がけています。「知的好奇心からの動機付け」

学生時代に栄養疫学を学び、面白い、楽しいと感じたことが自分の進路選択のきっかけになった経験から、学生にも経験を共有し、知的好奇心から学ぶことの楽しさを伝え、学習の動機づけにつなげるようにしています。

「社会実践につながる教育」

実践に近い分野、科目を担当しているため、実社会とのつながりを学生に感じてもらうことを重要視しています。そのため事例の調べ学習や実務家による事例の紹介などを取り入れるようにしています。学んだことが社会にどのように活用できるか、自ら考えて提案できるようにすることも重要であるため、調べ学習の発表とそれに対するフィードバックも大切にしています。

「授業計画の見える化」

個々の学生が学習を計画的に進めることにより、科目に対する学習の効果だけでなく、時間のマネジメントスキルも身に着けることができるようになります。そのために Web 上のシラバスのほかに詳細シラバスを配布し、予定（小テストや課題、発表の日程など）をあらかじめ提示し、学生がそれぞれのペースで学習計画を立てられるようにしています。

「達成度の見える化」

目標に対して達成度を学生本人が認識することで自己評価ができるようになり、自ら PDCA サイクルにのっとった学習を進めることが可能になります。そのため課題や発表については出来る限り早くフィードバックをするようにしています。

※分量の目安：15～24行（600字～960字）

アクティブラーニングについての取組

対面・オンラインのハイブリッド授業では教科書やオンデマンド教材も活用し、それらを通じて学んだ授業トピックスに関連して、調べ学習、トピックに関する意見や

考えなどをまとめる課題を出し、発表、意見交換を行いました。

ICT の教育への活用

教科書は配布資料などの教材に加えて、公衆衛生、公衆栄養に関連する公的機関の資料、動画などの情報を學理上提示することにより、授業内容の理解と応用を促した。実習では、データサイエンスの要素を多く取り入れ、データリテラシーの向上に努めました。GoogleMeet のグループ分けや、JamBoard などの機能も活用し、教員と学生間の双方向性のみならず、学生間でのディスカッションなどを円滑に行う工夫をしました。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

① 教育（授業、実習）の創意工夫（A～C）：A

オンライン授業を視聴する学生の環境（画面や音声）は様々で、長時間の講義動画は負担も大きく集中力が続かずに対面との差が生じることから、毎回の授業で、受動的な講義（動画視聴）とアクティブラーニング（調べ学習）を組み合わせるようにしました。講義動画はできるだけ簡潔に、見やすく、わかりやすく作成し、外部動画（公衆衛生や公衆栄養の取り組みの動画）なども活用し、視聴者が気分を変えながら楽しくすべて視聴できるように心がけました。アクティブラーニングは、身近なトピック（例えば感染症対策の章では新型コロナ）について情報収集して課題をまとめ、次の授業にて発表する形式をとることで、遠隔授業ならではの能動的な学びを促す工夫をしました。

実習では GoogleMeet のグループ分け機能や、JamBoard などを取り入れ、遠隔授業ならではの ICT 活用によって、インタラクティブな授業になるよう工夫しました。

② 学生の理解度の把握（A～C）：A

章ごとに小テストを行い、理解度の確認を行った。また、毎回授業アンケートとして、講義内容への興味の度合および難易度、課題の難易度、自由記載コメントを収集し、不安や不満を訴える回答には迅速かつ誠実に返答、改善を行いました。

③ 学生の自学自習を促すための工夫（A～C）：A

3. 教育の方法で記載の通り、ガイダンスで全体の授業計画をあらかじめ示すとともに、毎回の課題と次回授業の予習（教科書の該当箇所）を示すことで、自主学習を促しました。

④ 学生とのコミュニケーション（質問への対応等）（A～C）：A

オフィスアワー以外の時間でも、メールで質問のあった際には、速やかに対応しました。研究室への訪問の場合も丁寧に対応しました。実習では授業分担者や TA との情報共有をはかり、指導内容の共有を徹底しました。

⑤ 双方向授業への工夫（A～C）：A

対面とオンラインのハイブリッド授業では、発表、意見交換や質問の時間を設け、双方向コミュニケーションに努めました。

①～⑤を鑑みて、今年度の教育方法については、おおむね良好であったと感じました。遠隔授

業ならではの ICT 活用も試みることができたため、次年度からも継続して、教育効果の高い授業方法を探っていきたいと考えています。

5. 学生授業評価

① 授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

授業評価においては全体的には好評で、自由記載コメントには、発表、ディスカッションに対する好意的な評価が得られたため、授業にできる限り取り入れるようにしました。

② ①の結果はどうでしたか。

発表とディスカッションについては、最終評価でも好評でした。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。

今後も同様に実施していきたいと思います。

6. 学生の学修成果

① 学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

私の担当する公衆衛生学や公衆栄養学などの科目では、自ら考え、情報収集し、情報から答えを導き出す、または改善案を考えることができるようになることが重要です。定期試験だけでなく、課題など多面的な評価を行うことで、考える力を評価でき、フィードバックによって学生自身が PDCA サイクルに基づき学習することで、成績向上につながると考えます。

② 教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

遠隔授業における學理の活用が学生と教員の双方で進んだ結果、課題のフィードバックが容易となり、結果として全体的に今年度の成績は向上しました。

7. 指導力向上のための取組 (FD 研究会参加状況)

学内で実施される FD 研修会はもちろんのこと、ICT 教育に関する外部研修会などにも積極的に参加するようにしました。

8. 今後の目標 (理念の実現に向かう今後のマイルストーン)

短期目標

遠隔授業において、学生と教員の双方で進んだ ICT の活用を、対面授業においても継続させ、ハイブリッドの利点を生かした教育効果の高い授業を模索し展開します。

長期目標

公衆衛生、公衆栄養の分野の面白さに気づき、将来、関連する分野で社会に貢献する人材を育成します。

9. 添付資料 (根拠資料) (※) 資料名のみ

シラバス、教材、小テスト、課題、授業評価アンケート、授業に関するコメント、学理で実施した授業毎のアンケート